明海大学
不動産学部

不動産の話題 [52]

学生と教員の見方

〈まちなみのCG制作④〉

熱海 路地裏の戸建て住宅

【学生の見方&考え方】
(3年 川又大也)

熱海には少し早く午前8時台に着いた。朝早くから観光客のバスも見かけ、観光地らしさを感じた。昼頃になると駅の利用も活発になる。商店街はさらに多くの観光客でにぎわうようになり、来る前の想像を超えた活気を感じた。海水浴のイメージのある熱海であるから、駅周辺から海など自然が広がるイメージをしていたところ、駅のすぐ近くは中・高層のホテルやアーケード商店街などで占められていた。海水浴以外の観光についても充実しているという印象を受けた。

少し歩いていくと、1階が店舗、それより上の階は使用されていないのか、カーテンが閉められているのが目立つ、若干古びた中層の建物が散見された。更に歩いていくと、やはり店舗が多い中、普通の一戸建てや比較的新しい中・高層の集合住宅も見られた。中層の建物については店舗も集合住宅も若干経年していて、使い込まれた印象を受けるものが多かった。一方、高層の建物については全体的に新しく、綺麗なものが多いという印象を受けた。

路地裏のような場所には歴史を感じるような一戸建ても見られた。熱海の歴史を調べて見ると、別荘地としての人気もあったということがわかった。また、熱海の三大別荘と呼ばれる別荘があり、その一つに起雲閣という別荘がある。起雲閣は現在、熱海市が所有しており、市の有形文化財にも指定されている。別荘地としての人気もある。しかし、戦後の混乱期に多くが手放され、寮や旅館に転用されたという。転用後に別荘建築が継承されたケースもあり、旅館として使われてきた起雲閣はその代表である。

【アピールポイント】
ネットサーフィンが趣味で、そこで培ったネット・メディアリテラシーについては自信があります。

戦後、別荘は寮や旅館に

あった熱海らしい文化財という印象を受けた。

【教員による展開】(教員・明海大学不動産学部・斎藤千尋教授)

温泉が一番の魅力だが美術館、海水浴場、花火、梅園と、四季を通して客を楽しませるのが熱海には貫禄である。今回熱海が初めてという学生ばかりでそれが新鮮だったようである。「熱海市史」には20世紀初めは多くの別荘があったことが記されている。

川又さんは、ビルの合間に残る普通の戸建て住宅に目を向けている。表通りはレトロなビルや高層のホテルが目立つが、商店街から外れていくと、戸建て住宅、アパート、古い旅館も残っている。木造建築群に耐火建築物が割り込むかたちで形成された多くの市街地と同様、熱海も陸屋根の街と勾配屋根の街が入り組んでいる。基盤地図情報には屋根の形の情報はないが、平面形状、規模、建物種別からある程度の予想はできる。陸屋根の建物は立面で、勾配屋根の建物は屋根のかかり方で、それぞれ個性を表現することで、まちなみの熱海らしさを簡略に表現できそうである。

4回を通して学生の熱海の街の観察とまちなみのCG表現に関して展望や課題を書いてきた。CGは鋭意作成中でまだ披露できないのであるが、ワイヤーフレーム程度のレトロなCG表現を目指している。プログラムを通して意識してそれらしく見えるかたちを作り出すことは、手書きスケッチと似て、まちなみをよく理解することにつながる。リアルに描かれたネットの3Dマップとはまた違った役割があると考え取り組んでいる。

熱海の路地裏の様子